
LOVE WARS

羅幻徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE WARS

【Nコード】

N9730J

【作者名】

羅幻徒

【あらすじ】

目を覚ますと暗い洞窟の中だった。そして、目の前には甲冑を着た皇女の姿が。そこに魔王が現れ、『大魔術師の指輪を寄越せ』と迫る。皇女の必死の抵抗も空しく、魔王は力づくで指輪を外そうとするが……と、婚約者に起こされて、全てが夢だったことに気が付いた。

瞼をこじ開けると、目の前に栗色の瞳が輝いていた。

その瞳に見入りながらも、しかし、体は激しい睡魔に誘われようとしている。とにかく、少しでいいから眠らせて欲しい。それが本音だ。

だが、それはどうやら許されないらしい。

「起きて。目を覚まして、イスマエル」

もう一度揺さぶられて、俺は観念したように目を開けた。

安心したのか、俺を覗き込んでいた瞳の色が柔らかくなる。まるで宝石のようだと思いつながら、大きく息を吸い込んだ。

鮮明になった視界に、一幅の絵画かと見紛う美女。アーモンドの目に意志の強そうな眉。バラ色の頬と柔らかな唇。流れる黒髪は絹糸のように艶やかで、もしかしたら本物の女神なのかも知れない。見覚えがあるような気もするが、よく判らない。

と、そのときになって、周囲が闇に包まれていることに気がついた。見回してみるが、目が慣れていないせいか何も認識できない。

「ここは？」

云いながら、目をすがめて辺りを見る。暗くて何も見えないのは変わらないが、自分が壁に張りついていること、酷くジメジメした場所だということ、そして、目の前の彼女がまるで戦乙女のような甲冑を身につけていることだけは判った。

彼女が、俺の手首を戒めている枷を調べながら云った。

「カーンの要塞の洞窟よ。城が襲われたのを憶えていて？ あなたは、一味に攫われたの。必死に後を追ったけれど……ラウルやベツカムは死んでしまったわ。もう、私とあなただけ……」

頑丈な枷になす術がないと悟った彼女が、こみ上げてきた涙に声を詰まらせる。

小刻みに震えている彼女を、新たな気持ちで見下ろした。甲冑に

包まれた体は、だけど、鋼鉄をまとうには細過ぎるように感じられる。抱き締めたい、と不意に思う。すがるようにもたれかかって来た彼女が、とても愛おしい。

束の間俺の胸に頬を預けた彼女が、長いため息を漏らした。もう、体の震えは止まっている。そのことに安堵しながら、俺もそつとため息を零す。

「大丈夫？」

場違いなようにも感じる問いだが、正直に云うと、俺はこの状況を未だに理解できてはいなかった。カーンが何者かも判らないし、城というのも理解できない。そこから俺が攫われたということは、俺はその城に住んでいるということか？ それより、何故俺が攫われなければいけない？ 攫うなら、美女——たとえば彼女のような人物が定石ではないのか？

そんな俺の煩悶を知らないだろう彼女が、僅かに顔を仰向けた。そして、見ている方がほっとするような微笑を浮かべる。

「私は大丈夫。あなたは？」

頷こうとしたその時、暗闇の奥で石の転がるような音が聞こえた。そして、岩場を歩み寄って来る重い足音。

異様に近い場所から聞こえるのを訝しく思った俺は、慌てて音のする方へと目を向けた。

さほど離れていない場所に人影が見えた。

その人影は、闇に紛れているようでありながら、闇をものともしない威圧感を放っていた。実際、その輪郭は夜光虫のように浮かび上がり、獅子の鬘のような髪がその頂点でたゆたっている。手にしているのは、見上げるほど長くて大きな三叉の槍。

「これはこれは、アンリ皇女」と、雷のような声が轟いた。「このような場所にお運びいただき、恐悦至極。ごゆるりとお寛ぎいた

きたい」

慇懃に頭を垂れる人影は、けれど、云うほど彼女に敬意を表してはいなかった。言葉の端々がいちいち軽い。

それにしても、彼女が皇女と呼ばれたことに驚いた。むしろ、彼女がそう呼ばれたことに驚いている自分が信じられなかった。彼女に対して愛情を感じていながら、俺は、彼女の名すら気づかなかった。何故だ？

自問に溺れる俺をよそに、彼女が身を翻す。まるで俺を護るかのように立ちはだかり、例の人影へと向き直った。

「お心遣い痛み入ります、カーン殿。しかし、私達は長居をするつもりはありません」

云いながら、彼女はゆっくりと腰に下げていた剣を抜き放った。それは細い剣だったが、女性が振り回すには大きく、決して装飾用には見えなかった。どころか、抜き放った途端に広がったものは血の臭いではなかったか。

思わず、よせ、と云いかけたとき、彼女が跳んだ。

驚くほどの跳躍力で一気にカーンに詰め寄った彼女が、その長剣を一閃させた。軽々とかわすカーンを追いながら、返し手で斬りつける。追い詰めるまでには至っていないが、無駄のない動きを見れば彼女が剣の名手だと知れる。

しかし、体格差までは如何ともし難い。巨大な槍の一振りで剣を弾かれた彼女は、態勢を崩して昏倒した。倒れたときに頭を打ったのか、即座に立ち上がりながらも眩暈を振り払うように頭を振っている。カーンが余裕で大槍を構え直す。

彼女の元に駆け出そうにも、俺は相変わらず捕らわれの身だった。枷は微動だにせず、逆に、もがけばもがくほど締めつけてくる気さえる。

鈍い金属音が響いて、彼女が薙ぎ倒された。甲冑の胸の辺りが大きく窪んでいる。立ち上がりとした彼女が激しく咳き込み、黒っぽい液体を吐き出した。

大槍を彼女に突きつけたカーンが、口の端を吊り上げる。

「イスマエル、その指輪を寄越せ」

「何のことだ」

「とぼけるな。貴様が嵌めている、大魔術師アイマールの指輪を寄越せ」

思わず自分の手を凝視した。確かに、右手の薬指に飾り気のない指輪がはまっている。これが大魔術師アイマールの指輪だと？

「その指輪には、この世の全ての魔力を統べる力がある。精霊力然り。要するに、その価値も判らぬ貴様には相応しくない代物だ」

見ると、彼女が強く首を振っている。奴にだけは絶対に渡すな、ということか。だけど……と、自分の有様に絶望的な気分が襲う。

枷が外れない限り、指ごと切り落とされるおそれの方が大きい。

突然、カチリという音がして、手首の戒めが緩んだのを感じた。

枷が外れかけている。隙を窺おうとカーンへ目を向けると、奴は余裕綽々でこちらを見ていた。

「皇女の命が惜しくば、自らの意思で指輪を外せ」

「やなこった！」

と、俺は足元に転がっている拳大の石を蹴り上げた。狙いはカーンの頭。命中するかどうかは二の次で、奴の注意を注意を引ければいい。石ころの軌跡を追うように、俺は体当たりを喰らわすために地面を蹴った。

その瞬間、俺は馬にでも弾き飛ばされたような衝撃を感じた。いや、感じたかどうかは判らない。気がついたときには、既に壁に叩き戻されていた。息が止まり、目の前と頭の中が真っ白になる。崩れ落ちる自分の体を意識しながら、霞んだ視界の中で彼女を探した。今にも泣き出しそうな顔だ、と思ったとき――何故か、自分の手が勝手に動き出していた。

「イスマエル、しっかりして！」

彼女が、絶望的な表情で叫んでいる。

意識が遠のく。しっかりしなければと思いながらも、勝手に指輪

を外そうとしている自分の左手を止められない。何故だ。救いを求めるように彼女を見ると、涙が頬を伝っていた。

美しい顔を悲痛に歪めて、彼女が叫ぶ。

いい加減起きなさいよ！――と。

何！？　という自分の声で目が覚めた。

そこは、まぶしいほどに西日の当たった俺の部屋だった。タバコのヤニで微かに黄ばんだ天井に、サッカー選手のポスターが貼られた壁。学生時代に部活で着ていたレプリカのユニフォームが、カーテンの代わりにかかっている窓。そして、テレビの前でゲーム機のコントローラーを構えている、ほっそりとした後ろ姿……。

美容院でセットして来たばかりの黒髪を揺すって、彼女――杏里が振り向いた。

「誰だっけ？　十分だけ眠らせて、って云ったのは。ねえ？　勲」

むっつり顔で云われて時計を見ると、記憶にある時間から一時間ほど過ぎていた。

そう、十分だけのつもりだった。ちょっとだけうとうとすれば、それでスッキリ目覚めるはずだった。なのに、夢まで見てしまうほど熟睡していたなんて……。

それにしても夢オチかよ、と自らにツッコむ。確かに妙な展開だと思った。捕らわれているのは男で、唯一の攻撃手段は、石ころを蹴飛ばしただけ。出てくる名前は何処かどこか憧れのサッカー選手ばかり。しかも、ラウルとベツカムを死なせてしまったのか……と俺は、妙な方向に罪悪感を働かせた。

「ちよっと、いつまで寝惚けてるつもり？」

あからさまな不機嫌声に、俺はやっと我に返った。杏里がコントローラーを掲げて見せながら。

「これ、もう飽きちゃったんだけど」

見ると、画面にファンタジーRPGのフィールドが映っていた。そういえば、俺が寝ている間の暇潰しに、とダンジョン攻略を頼んだんだ。起き上がりながら、何処まで進んだ？ と訊く。

「あの洞窟なら、とっくの昔に攻略しちゃったわよ」

「え、終わったのか!？」

「そ。今は勇者イスマエル君の未来のために、ちまちまレベル上げをしてたところ」

マジかよ、と画面を改めて見直した。攻略したかどうかは判らないが、自キャラのステータス値が上がっているのは確かだ。俺の三時間の努力は一体……。

杏里が律儀にセーブして電源を切ってから、改めて俺の方に向き直った。

「私のささやかな努力に、何かお礼はないのかしら？」 イスマエル」

「お礼って何だよ？」

「ディナーなんてどう？ まあ、私はこのまま帰ってもいいんだけど……その場合、明日は一人で戦うことになるわよ？ 私のパパと」

そう云って、右手を目の前にひらめかせた。その薬指には、去年の誕生日にプレゼントした指輪がある。明日はそこに、本物の誕生石の指輪を嵌めるつもりだ――彼女の両親の前で。

やれやれと起き上がると、杏里は待ってましたとばかりにバッグを持って立ち上がった。多分、もう行きたい店は決めているんだろう。軽快な足取りで、さっさと玄関へと歩き出す。

俺としては別のものが食べたいんだけどな。

彼女の背中を見つめながら、冗談でも云えないな、と苦笑した。

(後書き)

素材に松任谷由実の”LOVE WARS”を使用しています。
第2回恋愛ファンタジー小説コンテスト (<http://contest.ohimesama.info/>) 出品作です。

ご精読アリガトウございました。
ご意見・ご感想・ツッコみなどは遠慮なくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9730j/>

LOVE WARS

2010年12月31日22時40分発行